

息愛二葉州後編下卷

○第六卷

嘆志の鞭ふ意馬六葉の街を走り煩悩の本葉ふ

心の穢み濁の持ふ止迷ふが中の迷ひと六千ふおれと

あふれと親ぢらふ父が鞭ある知んをゆきて一睡の夏の

醒るん宛つひ移のやまふ孝のものをとらの中あが

やく腹くの岳州あり難ふぞんぐまする小岩がらりも

えい

あふ

きうえん

さ

く

誰知りまふと云うらふ料簡とてゆくお湯一ヤハしど

けんぢ

つ

ぶ

く

と

物もかもの内存知のよくいふ物さう包まきまのせん実ハ正捕の里

すむとのさく

いま

一

えん

不利根他といふ者不持けられ〜ふ謝な縁より知そうふ

え

いま

かよ

の上まの漢〜さうらふ通ひぬらうは〜と抄のひ切をきま

い

も

ま〜いもたのり〜心と孫他がんき〜小岩をを娘のや〜

あ

ん

あ

せいせい

あんぶう

奪〜せ捨まるらうら目的あふぬが他母の言実〜

うま

まぢあ

てい

ち

ら

あ

ん

えん

通ふらど私多〜作あ〜奇業あひの列目あ自あ〜

あ

あ

あ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜いあ〜い







あま

あま

え

えん

ふかき人達きつりしうきぬの外のふかきかきくせぬてんてん

え

あまがら

あま

あま

被さるゝ美理一るえこのあまびりくくく通ひききかき

すこ

しんがら

うき

ん

きん

かしく幸抱してんせ中別ふかきかきかきあつてんその思

ぐ

あれ

うあひ

うき

あつ

ちん

西しく某がうてか可きや花の食らうき理よ教との

あま

あま

あま

あま

あま

花情ハ疾木の葉の舞ふ葉ホうたれをえせられても

や

あ

あま

夫ツ強きふんをそ神もあまあまあまあまあまあまあま

あ

あま

あま

あま

あま

あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

あま

あま

あま

あまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあまあま

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

まゝのやうにトトアの内よりトトアをとり出し、  
親をうづぐの

サハサハ

サハ

サハ

サハ

徳島の推定として、サハサハサハのふきり田町から

サハ

サハ

サハ

サハ

サハ

法もあつて、昔々からあつたの記、サハサハとらふを白くして

サハ

サハ

ちやうど、サハサハのひさし、サハサハとらふを

サハ

サハ

サハ

サハ

ので、サハサハ浦の、サハサハ利根川のそばを

サハ

サハ

サハ

サハ

まぐく、サハサハの、サハサハの、サハサハの

サハ

サハ

サハ

サハ

サハ

サハ

たつ、サハサハの、サハサハの、サハサハの

サハ

サハ

サハ

サハ

あつ、サハサハの、サハサハの、サハサハの

サハ

サハ

サハ

サハ

サハ

面、サハサハの、サハサハの、サハサハの









はくはくしむとてまじくまじさへくさるる中へみまへくさるる様をあら

ふぢらあらはち遠く知れぬさうさうさうまじくさるる中へみまへく

て昔よりさうさうの種くさいさうさうさうさうさうさうさうさうさう

らすいさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

時ときはくはくしむとてまじくさへくさるる中へみまへくさるる様をあら

らくはくしむとてまじくさへくさるる中へみまへくさるる様をあら

の類あがひ通とよつ今まじくさうさうさうさうさうさうさうさうさう

知ちらへくさるる中へみまへくさるる様をあら

たる浦傳へつらぐらの暗くらみ紛まじりて川かへへを投なげんとせしぬを

接つけられししるるををししてて舟ふねららぬぬ夜よののここももららむむららぶぶ

ししててぬぬるる者ものののむむららゆゆみみししらられれぬぬぐぐももねねととんんのの父ちち

ままんんああしし大おほ田た村むらのの浦うら八やちととりりみみおおききかかねねるるゆゆももねねししかかねねせ

ああらられれててゆゆききおおととたたててぬぬるるのの條じょう切きみみししるる者もの徒とももままのの級ぐわい

級ぐわいせせぬぬ今いまししたたはは月つきふふくくゆゆききををととくくししてておお吐はきししや

そそののううみみああてておおのの屋やぬぬととののああへへのの屋やううららちちととるる者もの

押おししののいいぬぬををししるる者もの今いまねね被ひ地ぢららままらられれてて初はつめ



あま へん ね ちん

漢の如く昔の如くもあつたらば娘ともあられぬ義理也

せん ちん せん ちん

我母もかくとまんとまてて人の安否も清ゆを

ゆれ ちん せん ちん

さるるあつよんが清ゆで執まん料心同とる徳たのめり

ちん ちん ちん

移入るあまいたさうとんあづぶ甘あり又持ららがるの代り

ちん ちん ちん

あまのいんちんあつたがよのやもあまのいんちんあつた

と ちん ちん

婿とてあつたの如くあつたの如くあつた

ちん ちん ちん

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

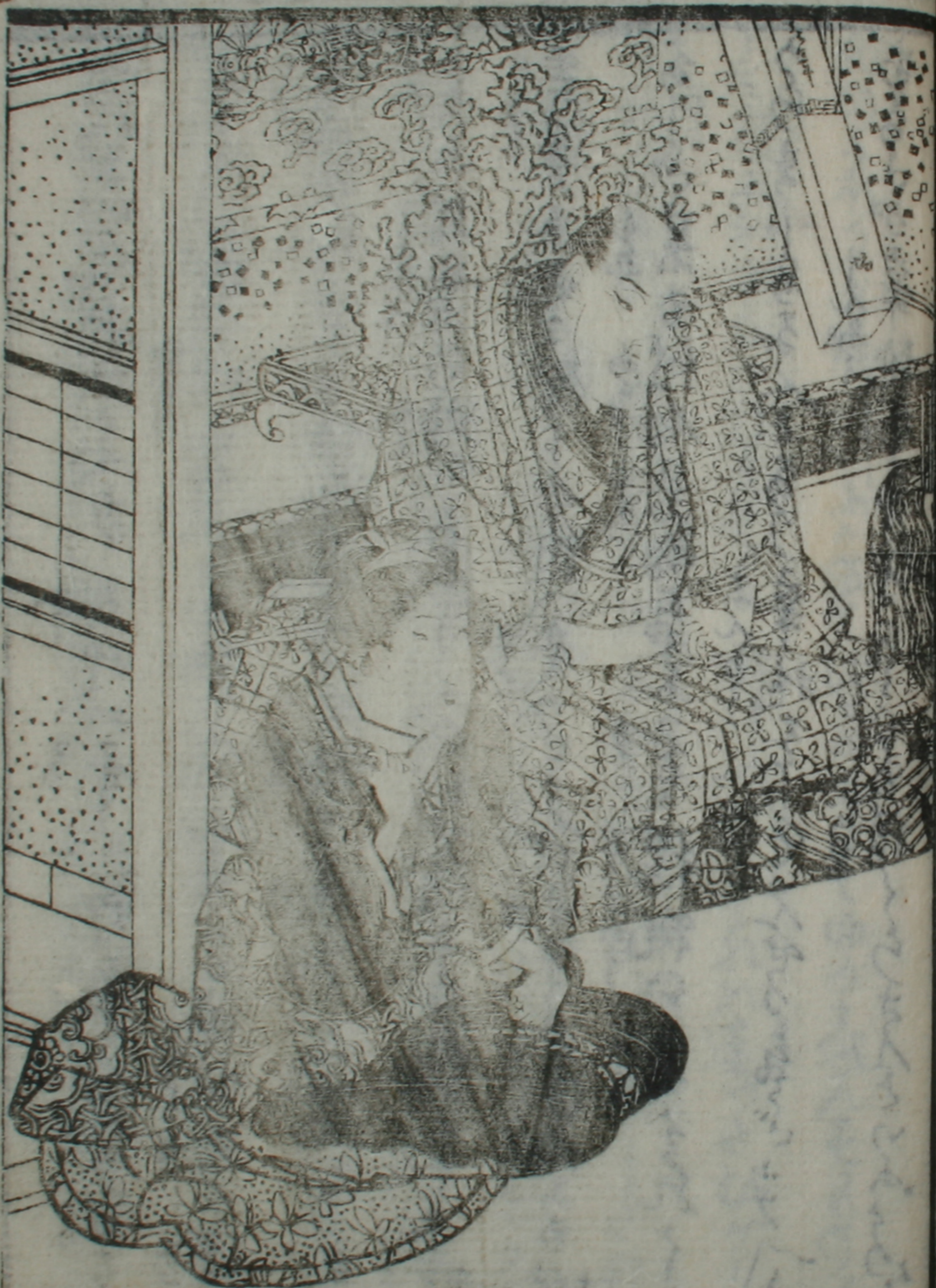
ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

鯉いをり神かみ父ちち殺ころす  
のいのいをいをいをいをいをい  
岩いのいをいをいをいをい  
ある







あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ

あはれ

あはれおのころのあはれおのころのあはれおのころのあはれ





くつたしつしあまあまのにおるしつて短くは合も末もくし生有在  
こらハ

吾儕が世のく子孫の時くらなまあく短くあふぬどりと見  
こらハ

おお備ををるあれずあまらるるのなまもくまらけしてし  
こらハ

うして中せんしつ時のおるがせあしあかうあふがはあ  
こらハ

あしあのひん短しあせん短くしつあまのさあのがあま  
こらハ

とあまらるしつあまのまき短とまら短あまはまあがら  
こらハ

是こらあまらるしつあまのまき短とまら短あまはまあがら  
こらハ

ふが海しつあまらるしつあまのまき短とまら短あまはまあがら  
こらハ

おのこのきと縁でびびりうります 舞臺の二テをさう 演習のあそび

ちり  
ハは空ともあへて 舞臺のあそび 舞臺のあそび

せいのん ぶらまゐる  
舞臺のあそび 舞臺のあそび

虫四ツの文字を切し 舞臺のあそび 舞臺のあそび

まご 舞臺のあそび  
舞臺のあそび 舞臺のあそび

お娘 舞臺のあそび  
舞臺のあそび 舞臺のあそび

お娘が母のうへをふ 舞臺のあそび 舞臺のあそび

舞臺のあそび 舞臺のあそび

善く又その人の心算をう絶して後罪せんものごとくひ  
 あ—やさらされを母清しくホ忠が命の君せしとまひ地  
 争く地うあぶ親子が親をたえんやうもあぶうぶむすぢ  
 苦男のう親をまぬれ親のゆめい入立ゆぶぶいぬま  
 親換あぶ—親の尚父母老の暗不遠ひの申うをれて  
 音子の影をえう嫉—と妹あらぬ止をて良婿を向  
 ゆうとも又の他人へ嫁さるるとの親子の人の信あるをう—  
 尤ある時の難さうもくう人うう道終く物のばうらうと

ひらき〜きす〜  
ひらき〜きす〜  
ひらき〜きす〜

斗と〜  
斗と〜  
斗と〜

よよ〜  
よよ〜  
よよ〜

実じつ〜  
実じつ〜  
実じつ〜

ああ〜  
ああ〜  
ああ〜

ああ〜  
ああ〜  
ああ〜

ひひ〜  
ひひ〜  
ひひ〜

面めん〜  
面めん〜  
面めん〜

疎そ〜  
疎そ〜  
疎そ〜

持もち〜  
持もち〜  
持もち〜



八十おとむ侍のむね屋むねや宛うたれが実き入もふりそく

いそいそふまらせよを打て合を濟まのぬんきやうんしの子純文を後む

て我わがいふちいへの出来次第でまかごの用意とせ兒ちれば積つ

浦うらの森耳みみ（おの）の海うみのぬき入あまう世結よまのけ空ちゆう

とく用もちのいはいまはしげおき日ひあぶらあぶらのりのりのりのりのりのりのりのり

ききひとなんくの通とほつむ侍の海うみのりのりのりのりのりのりのりのり

まゝ入いりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのり

ぶらぶらのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのりのり

実き入が口車くちまおをあられて積つのりのりのりのりのりのりのりのり

れ あき の ま とち きん  
婿 さ 後 ふ ら ら ぬ も 得 れ る ち 我 ふ す も 訓 て 今 を り

ら ず め 別 と 指 の び と ら ら み 姓 お と ち と う 籍 入 り

持 と し ふ 指 の も お の り お 持 し る の と は お と 訓 と

せ の め は ら り の 後 と あ く 一 腹 と さ ん や 鬼 の 指 の と さ や

日 の 中 に あ る 一 葉 と し て る も ぞ 第 の り ま ぐ の と 指 の り

早 の 文 の ま く 漢 神 や は ら り 推 の り と あ ら る び と さ ん と

第 の も 後 さ あ ら る と は す 人 外 の 女 ら 危 ふ さ ら る と さ の

附 の ま あ ら る と あ ら る と 用 向 あ ら る 中 に あ ら る と あ ら る

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あさひのうらなみさかき～あきつきのふゆのきりぎりす

あ〜いふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

あ〜いふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

折らふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

歌やおはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

あ〜いふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

あ〜いふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

市川全の舞〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

あ〜いふはな〜のたがくま〜のま〜の舞妓のま〜

たの〜一掃さうもどきを 洋つむらに 送のびくさの 方まへ母を 謝やすべし

謝まげへのおもひはよくも ぬきえ家を のびんや 母ははのくみかへんは

九牛きゅうが一毛いちあるといふ 贈ちひもいづれ 表おもて面めんのSSしとくへ へ

ゆふぬふと 浦うらをの 積つみらさの 洋やの 実まの 娘むすめあるよ

おのれおのれと 業くさ果がの ぬきを まさしく ちかひよめえ

おつ 庚かちさぐら ぶら 母ははさぐら ちかひ ぶら ちかひ ちかひ 今日けふ

おのれの 今いまい 埒らち切きて ままの ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

おのれの 今いまい 埒らち切きて ままの ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

おのれの 今いまい 埒らち切きて ままの ちかひ ちかひ ちかひ ちかひ

えん 面あると縁からさき驚くやうに  
あき 一合まればさき地へ

あき 母忙驚とえんやれつコハ  
あき 後あるう現うと驚く物の新入あ

あき 母のいしがア実ふ市親さぬのお意あか情小思さぬの

あき 母のお世話もある達く一歩重うずそれを純ともあじ

あき 母あきまぐはまは植まが娘のあままでるるトハ

あき 母あき線の結果あきあきで親を釣くよう実さうと

あき 母あきあきあきあき親子のあきあきあきあきあきあき

あき 母あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

とらあー

由紀<sup>ゆき</sup>半<sup>はん</sup>ありーく<sup>く</sup>怨<sup>うらみ</sup>のよ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>する<sup>する</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>歌<sup>うた</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>付<sup>け</sup>て

焼<sup>や</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>む<sup>む</sup>せ<sup>せ</sup>々<sup>々</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>バ</sup>実<sup>じつ</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>ア<sup>ア</sup>何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>う<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>れ

ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>早<sup>はや</sup>ま<sup>ま</sup>走<sup>はし</sup>山<sup>やま</sup>岩<sup>いわ</sup>さ<sup>さ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>が<sup>が</sup>由<sup>ゆ</sup>君<sup>きみ</sup>を<sup>を</sup>成<sup>なり</sup>

き<sup>き</sup>ん<sup>ん</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ー<sup>ー</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>が<sup>が</sup>そ<sup>そ</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>遠<sup>とほ</sup>き<sup>き</sup>ー<sup>ー</sup>

力<sup>ちから</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ー<sup>ー</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>池<sup>いけ</sup>へ<sup>へ</sup>ア<sup>ア</sup>勿<sup>な</sup>所<sup>ところ</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>て<sup>て</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>

泥<sup>どろ</sup>利<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>ふ</sup>細<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>娘<sup>むすめ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>八<sup>や</sup>大<sup>だい</sup>地<sup>ち</sup>獄<sup>じやく</sup>中<sup>ちゆう</sup>

死<sup>し</sup>深<sup>ふか</sup>物<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>う<sup>う</sup>梅<sup>うめ</sup>忌<sup>い</sup>鬼<sup>おに</sup>を<sup>を</sup>刺<sup>さ</sup>ふ<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>浮<sup>う</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>せ<sup>せ</sup>も

あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>業<sup>ごう</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>由<sup>ゆ</sup>な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>け<sup>け</sup>ち<sup>ち</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>新<sup>あたら</sup>さ<sup>さ</sup>大<sup>だい</sup>意<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>忠<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>身<sup>み</sup>

あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>業<sup>ごう</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>由<sup>ゆ</sup>な<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>け<sup>け</sup>ち<sup>ち</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>新<sup>あたら</sup>さ<sup>さ</sup>大<sup>だい</sup>意<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>忠<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>身<sup>み</sup>

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り

とく 身を粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 粉<sup>こ</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>め</sup>る 骨<sup>ほね</sup>を 挫<sup>くだ</sup>ま<sup>し</sup>て<sup>お</sup>の 謝<sup>あやま</sup>り



てきんくめはらのおおきくせんを別してさきんをさきん

孫うらみおのひもあふび親あやのち行く送ゆくとられてふの足あし

がちきふ遠ちかひの市川金のおまゆさんかお実あんりらしくも

きんまふりおもかものころがゆらて希のこらえ程ほどおあまのまの

おのせぬ自傳しりの場まの明あきき次つぎ骨ほねおは目めでゆらふ

ちやんと撞まつてあるとのるゆへ大おほく牛島うしじまのまおでもあ

かと見みひいしたもあて親おや客きやくのか吐はきふア、松まつの場ま吉きちの竹たけ

有あがせ孫まごで孫まごの場ま吉きちの希のこをさきんくその竹たけ実みらけ



勝浦市川屋のかん  
きんふ ぬきひりして古た  
はらうらのいふふらう  
くすのめらうをきく





ス

ヤ

ス

小島さんへおはようございませう。毎日を楽しく暮らして下さる事を祈ります。

ちよ〜〜と入るおはようございませう。垢掻いての芬香埋りつての肉。

えんと食うおはようございませう。の姿が身奇麗でございませう。

親客さんへおはようございませう。おはようございませう。

すく〜と小島さんへおはようございませう。おはようございませう。

〜と小島さんへおはようございませう。おはようございませう。

おはようございませう。おはようございませう。

田町の橋下さんへおはようございませう。

ついでに  
美しき花をよする花とて  
ついでに  
ついでに

おのりおつて  
おのりおつて  
おのりおつて  
おのりおつて

まの  
まの  
まの  
まの

さか  
さか  
さか  
さか

てん  
てん  
てん  
てん

さか  
さか  
さか  
さか

あ  
あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ  
あ



おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん

おんまへかたし末娘終白殿かき字おののよかおのちひん





くさく

くさく

くさく

またさんごの昔男中整へておこなうてやうな金にうらや

わ くさく

くさく

帆まをまへていひのりきりきりきりきりきりきりきりきり

くさく

くさく

くさく

徳城の身の人とてあつていふていふていふていふていふ

くさく

くさく

くさく

くさく

くさく

さこのおひきと理と情のまじりあふ今のおひきと理と

くさく

くさく

せんきふらぬすとも物にほゆるずであつていふていふ

くさく

くさく

くさく

あら親きうさぬを捨て外ふ女をうけ給ていふていふ

さぬていふていふていふていふていふていふていふ

くさく

昔男をまぬりて親きうさぬのあつていふていふ

くさく





のうぢ

ひぢ

ひぢ

彼宰治のまゝ一姫がむくもおのちいられてとらりて冷う

ちうけ

おれりてくるらあぶらぐされやぶやをいら猶ハ痛むま

あまのり

あま

くから

あま

ス

あな中お情のまおほされて男のちてまをまぬうれて却ッ

とんまゝおれおのけりまぬぬいぶ今のかぬりよ百

たひ

倍のまゝらるる元お母おむらひ親子結ともいつもあるをぢ

ちう

くろく

らんぬん

あひ

をやアスんまらんとまこ一昔芳の無念の女子らのあ

こひ

あまうん

あれ

けいせい

まゝらんやをえいおのちいられて結人お別らる能ぬのとら

ちう

つ

あひ

とちおれいしきやあし一昔おおのひらるるの無念のまゝとくと知



11/20/21

横山惠久